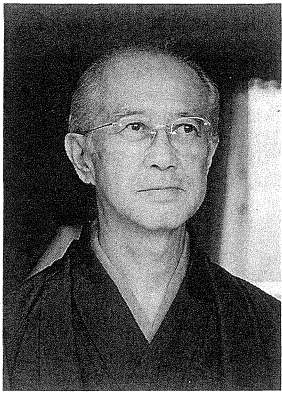


エッセイ

随想



おかだ・しんいち／建築家。1928年生まれ。東京大学工学部建築学科、エール大学大学院卒。1969年最高裁判所新庁舎競技設計最優秀賞。警視庁、岡山市立オリエント美術館、中近東文化センター、北海道立三岸好太郎美術館、岡山県立美術館、宇都宮市立美術館を設計。宮崎県立美術館で恩賜賞日本芸術院賞を受賞。新横浜労災病院、都立豊島病院を設計。現在、東大病院の全面建て替え計画に取り組んでいる。

ような爽やかなインテリアデザインが病室に与えられている。そして、高度の治療機能は病棟を取り巻くように新設されている。

この説明を聞きながら、外観をふりかえってみると、はじめ不調和にみえた各棟の微妙に異なるデザインも年月をかけたリノベーションの結果とわかり、かえって温かみのある人間的な感じすらしてくる。「百聞は一見に……」ということである。

我が国では現在、国立病院、大学教育病院、自治体病院などの大規模総合病院の建て替え計画が目白押しである。ほとんどが新しい病院機能を追求するために、旧病院を取り壊して建て替える方式がとられている。高度経済成長の時代には古いものは取り壊して新しく建て直す方法が（病院のみでなく全ての種類の建物に対して）とられてきたわけだが、低成長に落ち着き、それが定常化しそうな時代を迎えると、再生可能な丈夫な構造をもち、機能の老朽化に対してはリノベーション

「どこも変われば……」というように、海外旅行をする、いろいろな国で、さまざまな都市や建築に接して考えさせられることが多い。本年六月、病院建築の視察に東欧諸国を訪れたときの見聞は、これまで病院建築に対して私が抱いていたイメージを覆すものであると同時に、日本の都市の現状に対する危惧の念をさらに深くするものであった。そのことを書いてみたい。フィンランド特有の緑濃い美しい森林と湖に囲まれたクオピオ市の大学病院を訪れた。水辺のゆるやかな丘陵地に近づくと、幾棟かの集合で構成された建物が見えてくる。少しずつデザイン異なる建物の重なりが、見ようによつては味わい深いものがあるのだが、私の目には一つの病院としてのまとまりに欠けているように思われた。説明を聞いてみると、この病院はクオピオ市の地域病院であったものが、大学附属の教育病院に格上げされ、規模が大きくなって建て替えられたとのことである。多数の患者を収容する病院を運営しながら建て替えるわけであるから、時間と手間のかかる工事であった。旧病棟を中心に残し、新しい機能の外來棟、中央診療棟をその四周に取り囲むように建設し、全く新しい機能的な病院として生まれ変わったのである。説明の最後には「病院の質は患者に安らぎを与えるインテリアデザインによって決まるのです」という言葉が加えられた。

旧病棟の改装によって病室面積が広くなり、しかもリノベーションによって豊かな北欧の住宅にみられる

都市財の蓄積

岡田新一

ヨン方式で対応していくことが、最も経済的な建設であるということこそクオピオ大学病院は示唆しているように思える。

ウィーンでもA.K.Hという巨大な大学病院が建て替えられ、それは一つの小都市のような規模を呈している。敷地の中には、一七八四年にヨーゼフ二世により、民衆政策として建てられた当時の病棟が現在もなお残されている。プラハやブダペストでも、いくつかの病院が機能の老朽化から建て替えが検討されているが、古く在来の建物をどのように生かしながら新しい病院として機能を甦らせ、都市環境の中に調和させていくか検討が重ねられている。

このように病院を訪れその都市を見聞しているうちに、病院のリノベーションの方法が「都市との調和」と深く関わっていることに気付く。

ウィーン、プラハ、ブダペストはハブスブルグ家が神聖ローマ帝国の皇帝として東ヨーロッパを支配していた時代に建設されてきた都市である。数百年にわたる支配の間に、その時代に応じた建設や改造を加えて今日の都市の姿が完成した。ウィーンではフランツ・ヨーゼフの時代に旧市壁を取り壊してリングロードをつくるという大改造を行っている。このような折にウィーン国立オペラ劇場などが建設され都市は近代化していく。これらの諸都市は歴史的な価値、堅牢な構造、美しい様式に支えられて市民に受け継がれている。専制君主の世につくられた都市であっても、時代が変わ

れば民主主義の市民体制を容れる美しい器として市民の誇りとされるわけである。古き器に盛られた美酒……」の趣がある。その器は使い古され、欠けたところは丁寧に補修されて、その味わいはさらに深まっている。

パリもローマ時代の都市構造の中にナポレオン三世が凱旋門、ルーブル宮殿、そしてそれらを結ぶシャンゼリゼ大通りと放射状街路をつくり首都としての骨格を形成した。このオースマンによるパリ大改造という旧体制の都市計画を引き継ぎ、故ミッテラン大統領が新凱旋門、ルーブル美術館の改修(ガラスピラミッド)や大蔵省、国立図書館等の大プロジェクトを推進し、パリに新しい息吹を加え二世紀のフランスの首都が整備されつつある。このような最近の事情などとも思い起こされて、このたびの旅で見聞したいいくつかの病院に共通するリノベーションの手法もとりたてて現代の新しい手法ではなく、ヨーロッパの都市に共通する都市創りの延長線にある長く培われてきた方法であったと気付くのである。

日本の都市のように、古いものを壊して新しいものを建てるということを繰り返しては、都市は味わいを深めて、そこに定住したい気持ちの人々に起こさせることはできないであろう。これからは、将来のリノベーションに耐えられる堅牢な、そして空間の豊かな建築を都市に残し都市財を蓄積すべき時代を迎えているのではないかと深く考えさせられた旅行であった。